NPO・草の根活動

八尾柏原精神障害者福祉を考える市民の会　～きゃらふるやおかし～

「八尾柏原精神障害者福祉を考える市民の会」（通称　きゃらふるやおかし）は、1997年7月に発足し、来年2007年に、活動10周年を迎えます。八尾・柏原では、きゃらふるやおかしの愛称で親しまれていますが、この愛称は、会員から公募により決められました。やおかしとは、その言葉の通り、八尾と柏原を指しています。きゃらふるとは、「カラフル」＋「キャラクター（人・個性）がフル（たくさん）」のことで、たくさんの人が集まって、色とりどりの個性を咲かせているイメージを表したものです。

きゃらふるやおかしでは、精神障害者の生活支援を考えつつ、すべての人がいきいき輝いて豊かに暮らせる地域づくりをめざしています。きゃらふるの会員は、現在約200名いますが、きゃらふるという愛称どおり、当事者の方もいれば、福祉にたずさわってない方がいたりと、「きゃらふる」だからこそ、幅広い視野で考えていける面白さがあります。障害のある人もない人も、誰もが安心して、ありのままの自分がだせ、尊重し合える、そんなホカホカした社会を実現できたら、ステキだと思いませんか。

精神病の発症率は、統合失調症で、100人に1人がかかると言われています。精神科に通院していなくても、服薬等の経験がある方を合わせると、発症率はもっと高くなるでしょう。八尾・柏原の人口、約36万人の中には、精神障害をもつ市民が約3500人生活されています。その内、約900人は入院中ですが、その中の3割の方は、何らかの条件が整えば、退院して地域で生活できるという統計があります。

きゃらふるやおかしでは、過去に精神障害者に対するイメージについてのアンケートを実施したのですが、その結果は、「危険」「孤独」「怖い」というものでした。報道等を見ていても、「精神科通院歴が」とか「精神鑑定へ」という見出しをよく見かけますが、犯罪検挙者に占める精神障害者等の割合は、わずか0.1％なのです。地域の中には、まだまだ、誤解がたくさんありますが、きゃらふるの活動を通じて、地域との相互理解を深めていきたいと考えています。

最後に、きゃらふるの主な活動としましては、

①2ヶ月に1回の運営委員会
②月1回の定例会
③啓発イベントの開催、サポート
④機関紙の発行

があります。今後も、地域のニーズに応じて、アイデアを出しあいながら、きゃらふるにパワフルに活動していきたいと考えております。これからも、きゃらふるやおかしをよろしくお願い致します。

泉佐野市「劇団つるはら」

私たち「劇団つるはら」の歴史は古く、識字学級に端を発します。1963年隣保館完成に伴い開講した鶴原識字学級も、1990年の国際識字年とともに大きく発展し、学級生は40名を超えるようになりました。

毎日仕事や家事で疲れているものの、識字学級へ通い勉強するなかで、「どうして高齢になってから勉強するんや」、「それは差別のために文字を奪われたからや」、「みんなで差別をなくすための活動をやろう」ということで、識字学級生みんなで話し合い、劇団を結成して人権啓発活動に立ち上がりました。

ちょうどそんな時、第42回全国同和教育研究大会が開催され、鶴原識字学級生も参加し、他府県の参加者の解放のオガリ※を見て感激しました。「わしらも頑張るぞ!」と帰ってきてからそれぞれの生い立ちを作文に「解放のオガリ」の台本を作って活動を始めたのです。

「解放のオガリ」として近隣地域の小・中学校、人権関係の集会などで1年間に12回公演してきましたが、1992年に関係各方面から激励や感動の言葉をいただき、それにこたえるためにも「もっと本格的な劇にして、人権啓発活動を積極的に進めていこう!」と「劇団つるはら」を結成して、活動を続けてきました。以後、2002年まで7作の劇で公演してきましたが、その中には、泉佐野市の文化ホール大ホールでのこけら落し記念公演や大阪城特設舞台での公演などもありました。

現在は、小・中学校の子どもたちへ紙芝居を使って、実体験を交えながら戦争の恐ろしさ、生命の大切さや他人への思いやりの気持ちをわかってもらうための活動など、一生懸命頑張っています。また、仕事に就くことのできない若者にやる気を起こさせる取り組みを計画しています。

これからは若い世代との交流を通じて、私たちが築き上げてきた財産を引き継いでいけたらと今日も頑張っています。

※オガリ…「オガリ」とは、識字に関わる人々が、自らの経験や思いを語る群読や構成詩のことである。